

この論文は、障害現象における社会（歴史・文化・イデオロギーなどを含めた総合的な意味での社会）の役割に関して、一般的な「障害者福祉論」ではほとんど議論されない視点を提供する文章である。あまりにも行政主導、専門家主導、そして文化・社会の視点不在の「障害者福祉論」への問題提起の意義は大きい。

要するに、目が見えないなどの身体的特徴によってその人が「障害者」になるのではなく、社会が「障害者」と呼ぶ（規定する）ことによってその人が「障害者」となるのだ、と読んだ。

目が見えること、耳が聞こえること、手足が動くことを正常とし、常識とし、価値あるものとする政治的社会的経済的な力学が「健常者」から区別された障害者を生み出すという。たしかに人間の生活が深海魚のように視覚を使わなくなれば、視力は労働能力に関係せず、盲人を敬遠する事業主もいなくなり、盲人や視力障害という言葉も消滅する。光そのものがウイルスの性質をもつに至り人はすべて眼帯をつけて暮らすとか、地上が汚染し海底か他の惑星に移住するSF世界が起きるかもしれない。

その意味で今の社会が障害者を作ったといえる。しかし何10万年先に来るかもしれない社会と今を比べてどんな意味があるのか。

もう少し現実的な考えは、花田春兆氏がビデオ・EBISU MANDALAの最後で描いている下肢マヒ者の宇宙遊泳である。氏は、重力のない社会では下肢障害の影響がほとんどなくなるのだから視野を壮大な歴史絵巻に向けようと呼びかける。

さらに実際の生きた歴史の中では、生産・生活技術と産業構造の変化によって肉体労働から精神労働への主役の変化が起こり、50年前であれば「普通の人」だった人が今では重度障害者となり、当時であれば寝たきりの重度障害者がいまは医者・弁護士・議員として活躍している。

このようにすでに機能障害自体に環境（とくに社会的環境）の影響があり、障害を環境との関連で見ようとする見方が現在提案されているベータ2案と呼ばれる国際障害分類第2版案である。これと筆者が提案する「構築論的モデル」や「社会モデル」との違いがあまり明確ではない。

また、「障害者文化」と「社会が構築した障害」との関連もよく理解できなかった。

いくつかの関連する文献から得た文章を編集したという感じであり、そうした論者の意見に対しての筆者の批判的検討がなく、そしてなによりも筆者が強調しているはずの「障害者のリアリティ」についてのオリジナルな情報がほとんどなく、したがってこの課題についての研究を一步進めたという印象を持ってないことが残念である。

たとえば、(1980年版の)国際障害分類の社会的不利の定義が(障害者に社会への適応を求め)「同化主義」であると批判し、これに対してスエーデンの定義は個人ではなく環境を変えるものだと高く評価しているが、どちらも「社会的役割の遂行」を促すものであり、筆者のラディカルな視点からは社会的管理の方法論の違いにすぎないと言うような批判的検討がなされてもよかつたのではないか。